

寄書
~~~~~

## 北京からのメッセージ

那 宝 魁\*

新年おめでとうございます。

見学および研修をするために、私は幸いにして三回も日本に来たことがあつた。日本鉄鋼業とその研究開発部門を参観および考察させていただき、また、大同特殊鋼(株)中央研究所と新日鉄(株)基礎研究所にて約二年間の研修勉強をしていた。日本の先進的な鉄鋼業に対して深い印象を受けたばかりでなく、“一衣帯水”という友情の懐かしい思い出が常に心に浮んでいる。

大同特殊鋼(株)研究開発本部澤 繁樹本部長が、“研究開発ということは、新しい着想および速い速度を持たなければならない”と言つた。これは日本鉄鋼業の研究開発に関する全面的な総括と言えよう。つまり、日本の鉄鋼業の研究開発は“新しさ”および“速さ”という二つ特徴を持つている。機敏にエネルギー環境の変化に対応するため、日本においては、全コークス製鉄、転炉のOG法および全連铸などの方法を開発および採用していることは、世界における最も新しいおよび速い技術であると言っても過言ではない。戦後、日本は資源の乏しい、国土の狭い、資本の足りない情勢に直面しているにもかかわらず、鉄鋼先進国に先がけられる原因の一つは、新しいおよび速い研究開発にあるだろう。今後、日本鉄鋼業は資本集約より技術集約へ過渡するには、これらの二つの特徴がやはり競争力を強める鍵であると言えるでしょう。

日本鉄鋼業の各会社とその研究開発部門には、“人”と“物”という二つの因子は皆優れているが、“人”の因子は“物”の因子よりさらに重要な役割を果たしている。とくに人材は優秀の者から選出され、しかも自主管理および会社の運命と共にして働く精神は日本鉄鋼業を高速度的に発展させる重要な要諦であると思う。各会社の研究室と職場には“実践の強い意見と飽くなき追求心を”などのようなスローガンが到る処に見えること、まさに八〇年代に挑戦する姿を呈している。

日本鉄鋼業発展のたどつてきた過程に外国の技術の輸

入、研究ならびに再創造する面の経験は非常に重要である。出来るだけ有用なものを取り入れて、己れのために役立つようにする。青は藍より出でて藍より青し。技術を一円で買入れて、それを三円で研究開発にする。新日鉄における研究開発費は買上高の1%以上に達するそうである。新しい研究開発は鋼材輸出数量を確保できるばかりでなく、鋼材を使用する製品の国際競争力の維持・強化にも役立てるだろう。

日本鉄鋼業の発展は古い製鉄所の改造から漸次大型の新鋭臨海製鉄所を中心とした大規模建設になつた。たとえば八幡製鉄所ではLD転炉の導入、平炉の改造、連続铸造設備の建設、シームレス鋼管工場およびC. A. P. L. 設備作業の開始などの新しい輸入技術および研究成果はまず古い製鉄所に採用稼働し、然る後、新しい製鉄所に導入した。古い製鉄所は新しい技術および設備を発展する基地になり、新しい製鉄所の設計および建設に経験をもたらした。日本の古い製鉄所を改造する経験は大型の新鋭臨海製鉄所を建設する経験よりも発展途上国の需要によく見合うだろう。

世界において、日本は鉄鋼先進国に先がけて、技術だけでなく、管理方法も現代化になつたが、しかし研究開発については、生産技術面の研究が多く、基礎研究が少ないように見える。その結果、革新項目の成果が多く、創造項目の成果が少ない現在状況の原因の一つではないでしょうか。中国の資源環境に応じて基礎研究を強め、中国の資源に適する技術を案出していくことは日本よりさらに複雑および困難であると思う。新日鉄(株)参与不破祐博士は“中国の資源は複雑であるのに、鉄鋼界の科学研究者に広域的な研究課題をあたえる”と言つた。同時にこれも中日両国の鉄鋼技術者間の提携に広い前途を開けることと信じる。今後、両国鉄鋼業間の技術交流および友好活動が一層盛んになることを期待しておる。

(本文原文のまま)

\* 中国冶金部鋼鉄研究総院